

□ 生業・観光業の復興支援から展開する社会関係資本

岩手大学農学部 准教授 三宅 諭

1. はじめに

東日本大震災は日本が築き上げてきた社会システムの脆弱性を露呈させることとなった。被災者の生活再建には生業の再建が不可欠であるが、長い年月の中で築かれた、複雑に関係する産業の再生の糸口を見つけることは容易ではない。沿岸地域では、様々な主体が小さな活動を積み重ねつつ、一つ一つの繋がりを紡ぎ直す活動を行っている。

本稿では、岩手大学三陸復興推進機構コミュニティ再建支援班の一員として筆者らが取り組んでいる生業・観光業の復興に向けた支援活動について報告する。

2. 三陸の特徴と生業としての漁業

三陸の沖合は親潮と黒潮が交わる潮目と呼ばれる地域であるが、季節によっては日本海を北上した対馬海流が津軽海峡を通過して、太平洋を南下することもあり、三海流が複雑に交差している。そのため潮境では良好な漁場が形成されるといわれている。

三陸沿岸はワカメ、コンブの産地として有名であるが、これは栄養分が豊富なことから海藻類の生育が良いためと言われる。そして、海藻類が豊富なため、それを餌とするアワビ、ウニなどの良好な漁場ともなっている。また、三陸の沖合は海流に乗ってふるさとの河川に戻る鮭が南下する地域でもある。三陸では沿岸漁業が大半を占めているが、サケ、アワビ、ウニなどの栽培漁業とワカ

メ、コンブ、カキ、ホタテなどの養殖漁業を中心としている。つまり、「育てる」の上に成立している漁業であり、そのバランスが崩れると三陸の漁業も危うくなる可能性がある。

実は、三陸沿岸の漁業が発展したのは近世に入ってからである。網漁業が伝わり、漁獲量拡大と漁業生産の増加が実現したことだけでなく、海運が発達したことも重要である。つまり、遠隔地への海運整備、消費地からの需要、漁獲量および漁業生産の拡大という条件が揃ったことで三陸沿岸の漁村は発展したのである。

それ以前はほとんど交易がなく、自己消費を中心としていた。北上高地によって内陸との交通路は限られ、浜街道と呼ばれる沿岸を北上する街道が主要な街道だったからである。しかし、海運の発達により海産物が江戸に送られるようになると、質の良さから交易品として扱われるようになり、ついには長崎俵物として中国へ送られるようになった。

さらに、三陸の海産物が他の都市へ出荷されるようになると、大都市の商人が生産地へ進出するようになる。そして生産地から海産物を優先的に入手する動きもあって、三陸の漁業経営者が海産物の集荷・販売を行う商人へと変化することになる。これが三陸漁業の発展に繋がったのである。つまり、三陸漁業は交通網（海運）の整備と外部消費地の需要によって発達したのである。明治三陸大津波や昭和三陸大津波で壊滅的被害を受けながら三陸地域が復興してきた背景にも外部消費地からの支援がある。三陸産の海産物への需要と商

人による資本投資が復興へと繋がったのである。

3. 漁業を基盤とする生業連関

農林水産省の調査によると（表1）、岩手県で被害を受けた漁業経営体の再開割合は、一部の地域で7割以下という低い数字になっているものの、約8割が漁業経営を再開していることがわかる。被災事業所も8割近くが事業を再開しており、順調に復興しているようにみえるが、実際は復興事業に伴う建設業の影響が大きく、卸小売業や水産加工業の再開は5～6割と言われている。

沿岸部では漁業を基盤とした産業の関係性が見られる。小さな町でも鮮魚店は数多くある。競合している部分もあるが、その店によって特徴が異なり、魚市場からの入手経路や販売先などが異なっている。魚市場はどこも同じ旬の魚が水揚げされるということではなく、港によって水揚げされるものが異なるからである。それは、地域ブランドとも関係している。例えばサンマは宮古や大船渡に水揚げする方が漁師にとっても望ましいのである。鮮魚店も登録してなければ入札や競りに参加できない。そうすると協力関係を築くことで鮮魚類の入手拡大を図る必要があり、その結果、各店によって特徴が異なってくるのである。

つまり、漁港を中心として生産供給の連関が細かな分担により成立しているのである。

さらに、漁港の背後には水産物流や水産加工業があり、製氷や運送業、造船業や鉄工業、漁具販売などの多様な関連産業が集積している。加えて民宿などの海資源を生かした観光業も成立していた。このような地域社会を支えていた産業の繋がりを考えるならば、地域社会の復興には基盤となる漁業だけでなく、多様な生業の復興と創出が求められる。

一方、観光客（表2）をみると、岩手県全体では震災前を上回っているものの、沿岸部ではかなり減少していることがわかる。しかし、震災前には沿岸部は転出超過だったが、震災後には転入超過になっている。また、今まで岩手県に来たことがない人でも、ボランティアや観光による復興支援などで多くの人々が被災後に沿岸を訪れている。このような復興支援等で来ている人に地域の魅力を伝えるとともに、新しい人の繋がりを構築することは今後の観光業につながるはずである。そのためには、三陸の魅力を体験できる場を提供するのが一番である。筆者の研究室が行った調査では、美味しい食べ物があること、自然が豊かであることに加えて、地域の人とのふれあい、特産品が訪問意欲を高めるといった結果が出ている。

表1 漁業経営体の被災・再開状況

	漁業経営体数 (平成20年10月1日時点)	震災被害有り			震災被害なし
		経営再開	経営を行っていない		
洋野町	645	470	470	0	180
久慈市	145	130	90	40	10
野田村	115	110	100	10	0
菅代村	169	150	140	10	20
田野畑村	122	120	80	40	0
岩泉町	130	130	110	20	0
宮古市	1025	1030	870	160	0
山田町	544	540	420	120	10
大槌町	225	230	180	50	0
釜石市	827	830	580	250	0
大船渡市	877	880	790	90	0
陸前高田市	489	490	450	40	0
計	5313	5100	4270	830	210

出典：岩手県「図説いわて統計白書2014」

表2 市町村別入込客数（延べ人数）

(単位：人回)

	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
洋野町	759,162	769,646	747,569	738,296
久慈市	511,855	545,865	488,855	601,594
野田村	280,261	285,856	251,963	255,209
菅代村	39,874	39,095	51,264	55,603
田野畑村	669,295	625,940	52,820	280,640
岩泉町	818,247	431,908	284,839	373,739
宮古市	1,839,061	1,084,119	329,455	737,992
山田町	189,463	199,428	67,784	244,818
大槌町	189,406	147,915	-	3,500
釜石市	838,759	780,835	254,286	367,667
大船渡市	1,176,438	969,841	383,224	991,288
陸前高田市	1,116,127	945,719	23,961	169,001
沿岸市町村計	8,427,948	6,826,167	2,936,020	4,819,347
内陸市町村計	21,882,056	21,043,998	20,912,678	22,597,856
合計	30,310,004	27,870,165	23,848,698	27,417,203

出典：岩手県「図説いわて統計白書2014」

田野畑村では、震災前からサップ船ツアーを行っていた。始めた当初はそれほど知られていなかったが、次第にその魅力が知られるようになり、被災前には重要な観光資源となっていた。漁師の作業小屋である番屋群を利用したツーリズムやサップ船アドベンチャーズなどの漁業体験による観光戦略で来客数を伸ばしていたことを考えると、三陸地域の魅力は自然の雄大さと、そこで生きる漁村の暮らしを体験できることにあるといえる。



写真1 再開した田野畑村のサップ船ツアー

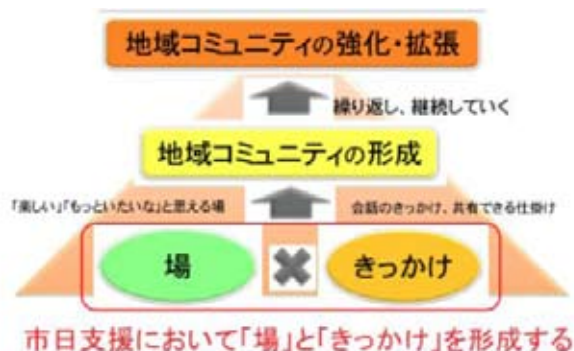


図1 市日支援の狙い



写真2 新巻鮭づくり体験の様子

4. 生業・観光復興に向けた支援の取り組み

沿岸では震災前から人口減少問題が指摘されていた。被災地では震災後の人口減少に拍車がかかり、20年後の推計では震災前の6割程度にまで人口減少が予測されている自治体もある。被災地で造成工事が本格化しているが、物理的な空間ができて“まち”ができるとは限らない。“まち”とは、人が集まり、交流し、多様な社会関係を構築する場である。人によっては商売であり、会話であり、飲食であるような、多種多様な人の活動が営まれる場所が“まち”になるのである。そして、そこには自分自身の存在を確認できる関係性があるはずである。したがって、“復興”とは、商店や住宅、事業所等が物理的に立ち上がるのではなく、そこを舞台に個人が存在意義を確認できる社会関係を取り戻すことともいえる。すなわちコミュニティの再構築である。



写真3 高校生も運営に参加した市日

筆者らは幾つかの地域で復興支援に関わっているが、若い商業者が新しい組合を設立して積極的な取り組みを行っている山田町では、市日の支援と体験型交流プログラムの企画・実践を行っている。

岩手大学のような外部の団体が市日に参加する

ことで、町民にとって新しい風を吹き込むことができるのはもとより、新しい交流を生み出すために、場所に留まる仕掛けを提供することを重視している。今後の継続性を考えるならば、我々が商売を行う一時的な集客よりも、地元の出店者が商売を行い、我々は市という場をコミュニティ形成のきっかけに転換する方が望ましいからである。

2013年度には、8月～12月に毎月1回行われた市日に店協し、場と交流のきっかけづくりを実践した。来訪者の期待を喚起するように毎月異なる企画とし、次第に社会福祉協議会や婦人会などの地元組織・団体の協力を得る工夫も行った。2014年度も6月から開催されている月1回の市日に参加しているが、新しい試みとして山田高校との連携を試みている。将来の担い手である若者の意見を踏まえて企画・実践することで、地域の主体性が高まることを期待している。

また、体験交流プログラムでは、漁業だけでなく三陸の海を生かした観光振興に向けたプログラムの開発を目指している。震災をきっかけに三陸を訪れる人は増えている。そういう人たちが三陸のファンになるように人と人の関係性を築くことが必要だからである。第一次産業が衰退傾向にあることは震災前から指摘されていた。そのまま第一次産業である漁業の再興を目指しても、近い将来衰退することは容易に予想される。それならば、漁業+ α を目指すことで三陸の可能性を切り開く必要がある。

2012年度には新巻鮭づくり体験を行った。鮭をさばき、塩漬けにするという行為だけでなく、SNSを活用することで、鮭が浸かっている様子や寒風乾しの様子が伝わるなど、新巻鮭が手元に届くまでの間も楽しめることが参加者にも伝わった。2013年度には正式プログラムとして試行されている。

5. 復興支援から構築される社会関係資本と復興

地方の強みは盆、正月、祭事に帰省する人が多いことである。お祭りに代表される地域の伝統行事を継承していくためには人が必要であり、居住していなくても節目節目に人が集まることは、その地域にとって大きな可能性を秘めていると言える。沿岸でも、お祭りの時には地域外から出身者が駆けつけ参加するなど盛況な様子が見られた。そこには居住地の絆を感じさせない一体感があり、その地域に対する誇りと愛着を感じることができた。重さ数トンとも言われる神輿を担ぐことの厳しさの中に誇りとアイデンティティが凝縮されているからこそ、出身者も戻ってくるのだろう。

従来は、地縁と呼ばれる土地に根ざしたコミュニティが基本となっていた。しかし、近代化の中で田舎のコミュニティも柔軟性を持つようになり、昔ほどのしがらみを感じさせなくなっている。また、地縁コミュニティだけでは地域社会の存続が危うい状況になっており、地域内外の人との土地を介さない新しいコミュニティ像の構築が求められている。それは、しっかりとした地域コミュニティが、地域外の人達との繋がりをたくさん持つことで形成される網の目のようなものである。地域コミュニティを基本としたネットワーク形成による新しいコミュニティ、すなわちネットワーク型コミュニティである。

人が集積し、様々な交流を行うことからまちが発展してきたことを踏まえると、お祭りやイベントに限らず、地域内外の人が集まり、参加しやすい状況をつくり、人の交流を促す場を積み重ねていくことは基本であろう。ただし、人口減少社会を見据えるならば、場所に根ざした地縁コミュニティから場を介在とするネットワーク型コミュニティへの変化が地域コミュニティの鍵になる。そして、そのネットワークには社会変化に対応できるしなやかさも求められる。従来の地縁コミュニ

ティとは異なる、集まる場を介した緩やかで強い人のつながりも地域の求心力となるはずである。そして、それ自体が祭事や地域行事など様々な取り組みの継承にも繋がるであろう。

6. おわりに

ある人は「ここで暮らすということは津波と共存することなのだ。」と言っていた。海によって発展してきた三陸地域は、やはり津波の来る海と共存する道を探さなければならないのだろう。そのためには海を資源として活かすことを考えなければならない。

人口減少が加速し、社会が大きく変わろうとし

ている中、被災地の未来を切り開くのは新しい社会関係の構築である。そのためには生業の復興に向けた支援活動から構築される人の繋がりが重要である。

参考文献

- 1) 三宅諭「三陸と海 津波と共存する地域」、季刊まちづくり32、学芸出版社、p92-95、2011年9月
- 2) 三宅諭「暮らしのグランドデザイン」日刊岩手建設工業新聞、2013年6月19日
- 3) 三宅諭「期待されるしなやかなネットワーク型コミュニティ」、日刊岩手建設工業新聞、2013年10月16日
- 4) 岩手県「図説いわて統計白書2014～いわてが分かるこの一冊～」、岩手県政策地域部調査統計課、2014年3月